

漢法苞徳塾資料	No. 074
区分	入門講座 基礎・経絡
タイトル	経絡運用論上の或る側面
著者	八木素萌
作成日	1990.07

湯液治療においても「薬味帰経」と言う事は大きな問題であるが、鍼灸治療においては経絡の運用の問題がほとんど全てである。そこで、経脈の機能が十全であると言う事とは何であるかを考えて見たい。

- a) 『難経』の四十六難には、老人は昼には動作が衰えており夜には目覚め易くよく眠れないが、少壮年の者は良く睡って目醒めることは無く昼間には動作がシッカリしてキビキビと精力的であるのは何故か、それは少壮年の者は血気が盛んで筋肉も滑らかであるから経脈の通路が良好なので「栄衛」がスムーズに機能できるからである、然し老人は血気が衰えて筋肉の滑らかさが失われて「栄衛」の「道」がうまく働けないからである、と記述している。
- b) 『難経』の四十七難には、顔面が寒さに対して非常に強いのは、陽経脈は頭面に走行し経過しているが、陰経脈は頤まで行って胸に戻っている、つまり頭面は「諸陽の会」であるからだ、と言う記述である。
- c) 『素問』三部九候論第20に「彈踝診」が記述されている。「敦煌」出土の医書の解析研究が進んで、これは踝の付近をトントンと弾いてその振動が下腿のどの辺りまで伝わるかを調べて、元気の程度や抗病力の度合いを知ろうとしている診察法であると判明するに至った。
- d) 腹診の重要な着眼点の一つに「肉と皮の繋り具合」「腹壁の弾力」と言うのがあり、「尺皮診」でも「筋肉の弾力」を問題にする。俗に「肌には「色・艶・張り」が無くてはいけない」と言う。

これらは全て〈「筋肉」が滑らかで十分な弾力があり「皮と肉」の関係が良好であると言うことが、経絡機能が良好である為には絶対に必要な事である〉と了解させるものである。

『靈枢』九鍼十二原第1には、病があると、トゲが刺さっているようであったり、汚れていたり、硬結があったり、閉塞しているようであったり、などが在ると記述している。他の篇には、陥没している所や隆起している所があったり、熱を帯びたり、冷たかったり、シブっている所や湿ってヒンヤリした所や乾燥してヒビ荒れたりしているとも記述している。

『難経』にも『内経』にも、五臓に病が在ると九竅（目・耳・口・舌・前陰・後陰）が不利になり、六腑に病があると癰疽が生じる（熱を持ち化膿する）と記述している。〈病が在れば必ず体表部に相応の反応が出るという認識がある事〉を示している。

経絡の走行のラインを過伸展の姿勢にすると、異常の在る場合には「痛み」が出るが、異常の無い経脈走行部では伸展されている感覚のみである。ヨガ・動気功・ストレッチング・正体法（整体法）など等は何れも、無理の無いように伸展させているが、これは関節がスムーズで筋肉皮膚などの軟組織を伸

びやかにして置こうとするものである。

〈関節が全ての方向にスムーズで、経脈走行部位は伸びやかで、動きは滑らかで、やや過伸展の姿勢にしても、痛みを覚えない〉と言うのが、経脈が良好に機能できる状態である

「オーリング・テスト」と「カラーの点穴」の反応を結合して「経の虚実」及び「補瀉の決定」を判定する方法がある。また、「メトロノーム」によって五臓別に音サイクルを出して、その音に対する感じが「快」であるか「不快」であるかによって、虚実を判断するという方法がある。

「経」に対して「補の色」であるか「瀉の色」であるか、に関する系統的で実証的な研究は、まだ蓄積されているとは言えない。周波数と五臓の係に研究発表は見られるのであるから、いくつかの方法を組み合わせて系統的な調査・研究が蓄積されるならば、多くの事項が実証的に明かにされることになるであろう。

「穴」が正常であるか否かを、手指や手掌で触診する「切診」にあつては、熟練した鍼灸師の場合、そのタッチは非常に軽いものである。皮膚上に診察手指をスライドさせたり、或いは患者の皮膚そのものをスライドさせるような操作を行ったり、軽く按压したり、穴位をつまんだり等々を行う。そして、表皮の僅かな「渋り」や「滑り」、あるいは微妙な「温度差」「虚軟」「膨隆」「濡滑」「渋硬」「不明瞭な塊状」など、その他極めて微妙な変異を捉えているのである。これは「スムースタッチ」と表現される極めて軽い撫擦で、皮膚上に表現されている異常を触知できるように、触覚・温覚・圧覚・その他の感覚を鋭敏にするような訓練・練磨が必要であることを明らかにしている。

このような極めて軽度な接触でも触知することが可能な状態は、「観察」「視認」の対象でもある。事実、熟練した術者は「経穴」「経絡」に表現されている異常を「視認」していることを、極めてしばしば表現するが、新人には「視認不能」である。ここにも「感覚の訓練・練磨」の重要性が示されている。

正確に取穴した「穴」に「施灸」すると、その「穴」が所属する「経」に添って「熱感」が走行するのを覚える、適切な技術で「刺鍼」すると「鍼感」が走行するのを覚える、そのような感覚があるのを「ひびきがでた」「ひびきが来た」「ひびきがあった」「ひびいた」などのように表現される。その感覚を具体的に表現してもらおうと、実に多彩である。治療が適切であれば「ひびき」は「快いもの」「心地よいもの」であつて、決して「不快なもの」「我慢しなければならない不愉快なもの」「苦痛なもの」ではない。

「穴」は病の信号として反応している。キチンと「ツボ」を使った治療を経験した人は、例えば、「この辺から風が吹き抜けるようです」と言いながら「三里」を指さしたり、「チクチクした」と「経渠」や「太淵」を指さしたり等のようなことが少なくない。本来的に「ツボ」は病気の信号を出して病人に教えるものである。この信号は多くの不自然な日常性や観念などによって感覚が曇らされているので、この信号を見逃したり、無関心になったりしていたのである。正しく「ツボ」を使った治療を経験して眠っていた感覚が蘇ったのである。